

ISSN 2186 – 3989

東風安生著

『寛容を基盤においた生命尊重の教育に関する研究』

富山房インターナショナル 2018年11月 A5版 245頁

武蔵野大学 教授 貝塚 茂樹

北 陸 大 学 紀 要  
第47号(2019年9月)抜刷

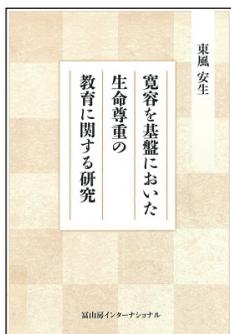
## 書評

東風安生著

### 『寛容を基盤においた生命尊重の教育に関する研究』

富山房インターナショナル 2018 年 11 月 A5 版 245 頁

武蔵野大学 教授 貝塚 茂樹



本書は、著者が昭和女子大学に提出し、2017 年 3 月に授与された博士論文「寛容を基盤においた生命尊重の教育に関する研究」を公刊したものである。基本的には、同論文の内容をそのまま書籍としたものであり、特に加筆・修正はされていない（あとがき）。本書の構成（章立て）は以下の通りである。

#### 論文要旨

第 1 章 問題の所在と研究目的

第 2 章 「死」を考える教育から未来の生き方を考える教育へ

第 3 章 これからの道德教育改革における生命尊重教育の位置付けと方向性

第 4 章 海外の道德教育と宗教教育—イギリスと韓国を中心にして

第 5 章 学校教育における「宗教的情操」について

第 6 章 「寛容」の精神と生命尊重の教育

第 7 章 寛容を基盤においた生命尊重の教育についての授業実践による検証

第 8 章 「寛容」と「生命尊重」を課題意識とした総合単元的道德学習の提案

終章 本研究のまとめと今後の課題

資料編

引用・参考文献一覧

あとがき

本研究の目的は、「寛容を基盤とする生命尊重の道德教育の在り方について提案すること」（6 頁）であるとされる。この目的に基づき、第 1 章では、「生命尊重の教育」の研究動向が整理される。第 2 章では、「生と死の教育」を中心とした生命尊重の先行研究が分析され、それを踏まえて、第 3 章では生命尊重をめぐる学習指導要領の内容の変遷が確認される。

また、第 4 章では道德教育と宗教教育の関係が、イギリスや韓国の動向を中心に整理され、第 5 章においては、特に戦後における「宗教的情操」教育に関する理解と動向について言及される。第 6 章では生命尊重の教育における「寛容」の価値の重要性について指摘しながら、今後の

具体的な指導の可能性について追究される。そして、第7章では、以上の観点についての検証授業の過程が実証的に検討され、第8章において「寛容」と「生命尊重」を基軸とした総合単元学習による新たな道德教育の在り方が提言される。

道德教育において「生命尊重の教育」は、本質的かつ究極的な課題である。道德教育が人間の在り方、生き方に関わる問題を対象とする以上、人間存在の本質である「生命」それ自体をどのように考え、位置付けるかは避けて通ることはできないからである。いうまでもなく、この点において道德教育は、「生」と「死」の問題を正面から課題とする宗教と密接に関わることになる。宗教が向き合ってきた「生」と「死」を考え、その叡智を踏まえることが、「生命の尊重」へとアプローチする有効かつ不可欠の課題となるからである。ところが、戦後の日本は、道德に対しても宗教に対しても、さらには「生」と「死」の問題に対して素直に向き合ってきたとは言えない。「道德アレルギー」「宗教アレルギー」という言葉に象徴されるように、戦後日本の社会では、道德や宗教が「タブー」視されたことも否定できない。

こうした状況の中で、著者が道德教育の根幹ともいえる「生命尊重の教育」を研究課題とし、さらに宗教の問題にも言及しながら、新たな道德教育の方向性を切り拓こうとされたことの意味は過小に評価されるべきではない。まずは、著者の熱意と勇気とに心から敬意を表したい。また、教育学において理論と実践の乖離が宿命的な課題とされている中で、両者を有機的に繋ごうと試みた本書の意義は大きい。その意味で本書の構成は、本来の教育学のあるべき意味を考える契機を提供してくれる。

本書の内容では、西洋と日本における「寛容」の価値を比較し、日本のそれを「道徳的寛容」と表現し、そこを基軸とした展開の構想を提示したことは新鮮な刺激を受けた。さらに、本書には新たな視点も随所に散りばめられており、その意味と可能性は積極的に評価できる。

しかし、一方で本書には次のような課題も指摘できる。

第1は、本書全体の課題設定が必ずしも明確ではないことである。前述したように、「寛容を基盤とする生命尊重の道德教育の在り方について提案することを提案する」ことが本書の目的であるというだけでは、本書の意図と意味が読者には明確には伝わらない。なぜ、「寛容」が問題なのか、なぜ、「宗教的情操」が課題なのか、なぜ、カント、ロックが取り上げられるのか。海外の事例としてイングランドと韓国が中心的に取り上げられる理由とその妥当性の根拠はどこにあるのか。どうして、総合単元の学習が有効なのか。こうした疑問は、先行研究の分析→目的・研究課題の設定→研究方法の提示という学術研究の基本的な手続きと説明が本書全体において必ずしも説得的に説明されていないことに基因している。本書全体を通じて、目的と課題と方法が読者に明確に伝わるための丁寧な記述が必要だったのではないかと、というのが評者の率直な感想である。

第2は、上記に関連するが、先行研究の分析が必ずしも十分とはいえないという点である。「生命尊重」「寛容」それ自体が大きな研究テーマであり、先行研究の範囲が広がることは避けられないが、巻末の「引用・参考文献一覧」を見る限りでは、当然に押さえられるべき文献のいくつかが抜けているように思える。また、註記では学会の発表レジュメ等を示しているケースもあったが、常識的にはそれらは後に論文として発表している場合が多い。この点は慎重にフォローされるべきであり、論文として発表しているにも関わらず、発表レジュメが引用されることは、何より引用される側にとって不本意であるはずである。

第3は、本書の内容と直接には関係はないが、学位論文を発表する場合における公刊の方法についてである。これについては明確なルールがあるわけではなく、見解の分かれる点でもあろう。しかし、一般論として、研究成果を公刊する場合には、専門領域を異にする不特定の読者を想定した配慮と編集方法が求められるように思える。有り体に言えば、本書のように、「論文要旨」から始まる学術論文の発表形式は、一般の読者にはある種の「違和感」を感じるのではないかと。もちろん、本書のように学位論文をそのままの形式で公刊することには著者なりの意図や思いが

あつたはずであり、こうした「違和感」も評者だけのものかもしれない。ただし、それならばそれで、著者の意図や思いが詳しく説明されても良かったのではないか。また、学術書である以上は、少なくとも索引は付されるべきであろう。

さて、以上の点は本書の成果と意味を否定するものではない。先に述べたように、本書の試みは、「生命尊重の教育」研究に新たな一石を投じるものであり、本書が今後の研究の基本文献となることは確かである。同じ研究テーマを追究している評者としては素直に感謝したい。今後は、本書を貴重な先行研究として、さらに本書を乗り越える研究が展開・蓄積されることを期待したい。